

富山市立図書館

# 図書館だより

第43号  
2010.12

## 富山に生きた作家 岩倉政治

### 岩倉政治文庫公開記念

富山市立図書館は11月3日、「岩倉政治文庫」を一般公開いたしました。

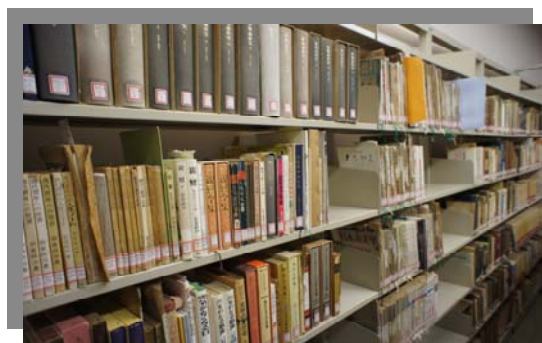
ふるさと文学に対する注目が高まる中、富山を代表する作家の一人である、岩倉政治氏の足跡をあらためて振り返るとともに、文庫に収蔵されている資料について、ご紹介いたします。

#### 岩倉政治氏について

岩倉政治氏は、明治36(1903)年3月4日、東砺波郡高瀬村(現南砺市高瀬)に、農家の末っ子として生まれました。学業成績は優秀でしたが、当時の農家の暮らし向きは決して豊かではなく、東京や大阪でさまざまな職に就きながら、勉学に励む日々が続きます。昭和元(1926)年には大谷大学哲学科に入学、ここで生涯にわたって師と仰ぐ、鈴木大拙・戸坂潤と出会い、多大な影響を受けました。戸坂の勧めで「唯物論研究会」に参加し、変名で論文を発表しますが、時代は軍事色が濃くなりつつあり、治安維持法のために、二度にわたって検挙されます。

このような状況の中、昭和14(1939)年、自宅拘禁中に執筆した処女小説「稲熟病」が、芥川賞候補となります。残念ながら受賞はなりませんでした。農村で暮らす人々の姿を鮮やかに描き出した手腕が注目を集め、『中央公論』『文学界』『知性』といった雑誌に、次々と小説や評論を発表するようになりました。昭和15(1940)年には、短編小説「村長

日記」で農民文学賞有馬賞を受賞しています。のちに岩倉氏と親交を結ぶことになる、作家の故・水上勉氏は、この頃の岩倉氏について、同じ北陸地方で文学を志す一青年である自分にとって、憧れの存在だったと語っています。



文庫室内の様子

戦後は富山市に居を定め、日本共産党に入党して政治活動を行うとともに、自ら「新富山文学会」「現実派文学集団」などを結成し、富山における文学の振興に尽力します。この頃の代表的な小説作品には、江戸時代の宝暦年間に砺波地方で起きた、大規模な一揆に題材を得た『田螺のうた』があります。この作品は「ばんどり騒乱記」の名で戯曲化もされており、東京や大阪、富山でも上演されて好評を博しました。

昭和58(1983)年、長編小説『無告の記』三部作を発表します。この作品は原稿用紙にして約1,600枚にもおよぶもので、岩倉氏の自伝的小説であると

ともに、明治末から昭和初期に至る、時代背景をも浮き彫りにした渾身の一作でした。同年には、富山県文化功労者表彰を受けています。80歳という高齢で、このような大作を発表したあとも、数々の作品を手がけており、死の前年まで、新聞に「北風抄」と題した随筆を連載するなど、平成12(2000)年に97歳で永眠するまで、文学にかける情熱は決して衰えることはありませんでした。

## 文庫に収蔵された資料について

文庫にはまず、岩倉政治氏の旧蔵書が、書籍・雑誌を含め、およそ2,000冊収蔵されています。そのうち岩倉氏の著作は、およそ480冊で、昭和10~20年代に小説や評論の掲載された雑誌が多く残されています。これらにはその後、単行本に収録されなかったものが多く、これまではなかなか読むことができませんでしたが、この文庫で多くの方々が手に取ることができるようになったのは、大きな収穫といえます。また、その他の蔵書も、学生時代に研究した唯物論哲学や仏教の学術書から、平成時代に入ってからベストセラーまで幅広く、岩倉氏の作家としての読書生活を反映したもので、岩倉文学成立の背景をうかがい知ることができます。

郷土資料が多く収蔵されていることも、大きな特徴です。交友の深かった、高岡市出身の画家・盤若一郎氏をはじめ、石黒連州氏や浅井景一氏など、県内で活躍した芸術家の作品集や、「たてやま」「紫苑短歌」「富山詩人」など、県内主要文学同人の雑誌・個人作品集があり、これらには岩倉氏も折にふれて、推薦文や随筆を寄せています。富山の文化・芸術界において、岩倉氏がいかに多大な貢献をされていたかを示すものでもあります。

また、岩倉氏直筆の生原稿は、文学研究上、この上ない貴重な資料といえます。中でも1,600枚にもおよぶ、代表作『無告の記』の原稿は、その圧倒的な分量もさることながら、丹念に書き込まれた推敲のあとから、作品成立の過程を知ることができます。その他、およそ80点の生原稿の中には、「天上界」

「城旗地区群雄傳」など、昭和10~20年代に執筆され、未発表のままであった小説作品の原稿が含まれています。これらは、今後も富山の文学界における重要な財産として、後世に伝えられていくべきものといえるでしょう。



直筆原稿と愛用の眼鏡

書簡も多く収蔵されています。(1) 亀井勝一郎、横光利一、中野重治といった、著名な文学者からの書簡は、岩倉氏のみならず、日本文学全般の研究上、大変貴重な資料です。生涯にわたって交友を続けた恩師・鈴木大拙からの書簡は、昭和10~20年代に集中しており、戦争へ向かう時代の世相をもうかがわせる、意義深いものとなっています。また岩倉氏は、読者から寄せられた感想の手紙や、ファンレターも大事に保管されていました。作品の受け止められ方に注目し、次の作品へと反映させていくための、謙虚な姿勢のあらわれと言えます。

そして、これらの資料を整理していく中で気づかされたのは、「岩倉氏は家族を非常に大切にされていた」ということでした。例えば、戦争中体調を崩し、鯖江の陸軍病院に入院していた時は、ほぼ毎日のように理意夫人に手紙を出され、病状が気になりであろう夫人に、なるべく心配させまいとする心遣いがうかがえました。また、子どもたちが自立し、それぞれの分野での活動が、新聞や雑誌に取り上げられた時は、必ず切り抜きを保管されています。こうした家族に対する深い愛情が、家族を題材にした小説である「五年目の雪」や「ハトムギの夏」などに、結実していったのだということを実感させられました。

(1) 書簡の公開には、発信者もしくは著作権継承者の許諾が必要であるため、現在はその多くが非公開になっています。

## 岩倉政城氏が来館

文庫を公開した11月3日には、ご長男の岩倉政城氏が来館されました。政城氏は現在宮城県在住で、尚綱学院大学教授・同附属幼稚園長を務めておられます。

政城氏は、政治氏が亡くなられた後、遺されていたこれらの資料を整理しようと、一度作業を試みられたことがあるそうですが、いざ取り掛かってみると、その分量に驚き、これは大変な作業だと実感されたそうで、「すべてを整理し終わるには、この先何年もかかるだろうと思っていましたが、こんなに早く整理・公開していただき、ありがたいことです。多くの人にご覧になっていただきたいですね」と感無量のご様子でした。

「そうそう。この時、瑞泉寺のことをいろいろ調べていたなあ」と、懐かしそうに手書きの原稿や取材メモなどをご覧になりながら、政城氏は在りし日の父上の姿をいくつも語られました。その中から一つ印象深いエピソードをご紹介します。

岩倉政治氏は講演会の講師を依頼されることが多く、そのテーマも文学から社会問題、仏教など多岐にわたっていますが、聴衆からはたいへん評判が良く、中には追っかけのようにして、あちこちの講演会に来場する人もいたそうです。その理由について、政城氏は「父は、自分のみっともない面をさらけ出すことによって、聴衆の心を惹きつけることができる人だった」と分析されました。つまり、「自分は今、この壇上で話をしているけれども、自分だって、みなさんと同じようにいろいろ失敗もやらかしたし、悩んだりもしているんですよ」と聴衆を笑わせるなどして、同じ目線に立った上で、「そんな自分はこんな風に考えているんです」と本題に入っていく。聴衆は安心して聞き入ることができ、「岩倉さんの講演は、すごく身近で分かりやすい」といった感想を持つことができるのです。多くの聴衆の前で自分の失敗談を披露するのは、相当に勇気のいることですが、人々の共感・信頼を得るためには、そのくらいの覚悟は必要だと、政治氏は考えておられたのでしょう。常に民衆の視点に立つことを忘れず、自らの文学のテーマとしてきた、政治氏の人柄

をうかがわせるエピソードです。



直筆原稿をご覧になる岩倉政城氏

## 文庫の活用に向けて

文庫は公開されましたが、収蔵された資料は多くの方々に利用されることで、その輝きを放つものです。ご長女で劇団青年座女優である、岩倉高子氏からも多くの資料や本を整理したことに対し、感謝のお手紙をいただきましたが、その中には「沢山の人が利用して下さることを祈っています」と、活用への期待をこめたお言葉をいただいております。

「岩倉政治文庫」には、富山を代表する作家である、岩倉政治氏の業績が網羅されています。岩倉氏の肉筆や作品を直接目にすることで、作家の生きた証を体感できることと思います。研究者や文学愛好家の方々はもちろん、これまで岩倉氏の名前は知っていても、作品にはあまりなじみがなかったという方にも、ぜひその世界にふれていただき、ふるさと文学の魅力を感じ取っていただきたいと考えています。

(本館 舟山)

### 文庫閲覧時間

午前9時30分～午後5時

(ただし、土～火は12時～14時、

水～金は12時～13時の間、閉室)

富山市丸の内1丁目4-50

富山市立図書館本館6階

TEL 076-432-7272 (代表)



# 小布施町立図書館「まちとしょテラソ」

長野県上高井郡小布施町小布施 1491-2 URL: <http://machitoshoterrasow.com/>

## 小布施の町と新図書館

小布施町立図書館（通称「まちとしょテラソ」）は、長野県上高井郡小布施町に平成 21 年 7 月に新図書館としてオープンしました。小布施町は古くから北信濃の経済・文化の中心で、葛飾北斎や小林一茶をはじめ多くの文人に愛された土地です。現在の町の人口は約 1 万 1 千人ですが、年間 120 万人の観光客があり、美しい町並みに人気があります。

新図書館を建設するにあたり館長を公募し、建物も 166 件の応募の中から公開プレゼンテーションを含む審査を経て設計者が選出されました。図書館づくりは町づくりであるという思いから、町民公募で作られた図書館建設運営委員会と町、図書館、学識経験者等が一体になって検討し作り上げたということです。

「まちとしょテラソ」は「交流と創造を楽しむ文化の拠点」であり「子育ての場」「学びの場」「交流の場」「情報発信の場」という 4 つの視点から運営されています。新図書館が開設してからも、館周辺の緑化を考える植栽プロジェクトなど町民との協働作業によって多くの企画運営がなされています。

## 施設設備

玄関を入るとすぐに案内・貸出・返却を行なうカウンターがあり、ここに館長席が設けられています。

人の気配を感じられる雰囲気大切にしているとのことで、館内には音楽が流れ、事務室・多目的室などの壁や扉は半透明になっています。

外観



エントランス



カウンター



書架

書架や椅子、机などの家具は統一したデザインが施されています。照明は主に間接照明が採用され、館内はやわらかい橙の光に包まれています。夜にはその光が窓からこぼれ、「テラソ」の通称にふさわしく、町を照らす大きな街灯の役目も担っています。

## 図書館活動の特色

エントランスを使用しての演奏会や、町議会議員による報告会を行うなど、町民の交流の場として図書館が活用されています。その他、館で所蔵している資料をもとに、体操を町民と実践する「まちとしょテラソで身体を動かそう」など、読むだけではない蔵書の活用法を提案しています。

また、小布施町の文化を収集・公開し、後世に伝承する「小布施デジタルアーカイブ事業」を展開し、古地図を使って現代の町並みの写真と昔のそれを視覚的に比較するソフトの開発を行なうなど、小布施の情報発信地の役割を担う場として、図書館の存在を示しています。（本館 山崎）

# 本をめぐる人とひと

今年もあと残り少なくなりました。今年は「電子書籍元年」ともいわれ、日本での iPad の発売開始や、村上龍氏や京極夏彦氏といった人気作家が単行本と電子書籍版の両方を出版するなど、本の電子化について活発な動きがありました。その一方で形ある本が担う役割を見直す意見も出ています。本は人の手を介し、読者に届けられています。そこで今回は本を介した人とひとのつながりに着目し、作品をご紹介します。



『昔日の客』

関口 良雄 / 著

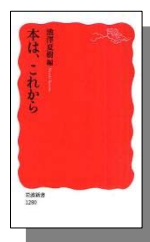
夏葉社 2010

最近の単行本では珍しい布張りのこの本は、東京・大森で古本屋を営む筆者が生前に書き溜めた文章を1冊にまとめたものです。古本屋の日常の一幕や、敬愛する正宗白鳥や尾崎士郎といった作家たちとの交流を軸に、本を愛してやまなかった筆者の人柄が文面からにじみ出ています。ご子息によるあとがきには、昭和53年に出版された後、長らく入手が難しかったこの作品を、一人で会社を立ち上げた青年が復刊を望み、遺族の協力を経て今回の出版にこぎつけた経緯が綴られています。

この古本屋には作家の沢木耕太郎氏も通っていたそうで、エッセイ集『バーボン・ストリート』（新潮社1984）にも登場します。私も実はこのエッセイで「昔日の客」を知り、読んでみたいと思っていた一人です。電子書籍市場の成長により、古書の電子化での復刊は容易になるかもしれませんが、形ある本からは、復刊に関わる人の熱い想いが手にとるように伝わります。

本が出版されるまでには、作家はもちろん編集者の役割も大きいものです。老作家と女性編集者の交流を描いた「火の魚」（『蜜のあわれ・われはうた

えどもやぶれかぶれ』講談社文芸文庫1993に所収)は、昨年ドラマ化もされた作品です。物語は、老作家が次に出版する小説の装丁に金魚の魚拓を用いることを思いつくところからはじまります。老作家は自分でも魚拓をとるがうまくいかず、折見とち子という編集者に魚拓を依頼します。短い作品ですが、その中に「とち子」という女性の特性が鮮やかに浮かび上がり、女性を描写することにかけては鋭い観察眼を持つ作者の晩年の筆の冴えが感じられます。ドラマの内容は『テレビドラマ代表作選集2010年版』（日本脚本家連盟2010）で読むこともできるので、原作と比較するのも一興です。



『本は、これから』

池澤 夏樹 / 編

岩波新書 2010

電子書籍が話題となる今、「本」とは何か、どのような変化をとげるかについて、作家や書店、図書館に携わる立場などからそれぞれの意見を集めたエッセイ集です。国立国会図書館館長の長尾真氏はこの中で電子図書館の可能性を示唆し、本の電子化における利点を説いています。その一方で他の筆者からは、紙の本への愛着を語り、書籍の装丁の妙を愛でる声もあげられています。私が特に興味深く感じたのは、この中で複数の書き手が、紙の本が持つ魅力として、偶然の出会いの可能性を挙げていることです。ふとした時に手にとった本が、思わぬ発見をよんだり、それまでの考え方を変える契機になった経験は誰しもあると思います。それは本を介しての送り手と読者の出会いともいえるでしょう。電子書籍の、必要とする情報を効率よく収集できる点は魅力的ですが、紙の本が持つ良さについても改めて考えさせられます。 (本館 沖)

# レファレンスあれこれ

参考図書室では、特定の本ではなく、漠然と「このような絵や写真がないだろうか？」と相談を受けることがあります。

今回は、書架から該当する図柄を探し出して対応した事例を紹介します。

**Q. 昔のあめ細工の屋台の様子、棒の先についているあめ細工がわかる写真か絵を見たい。**

**A.** 鶴、猫、鳥などお客の注文に応じ、その場でどんな形にでも作ってくれる、縁日大道芸の花形、飴細工。富山県内のお祭りの露店においてもよく見かけるようになった。

参考図書『日本大百科全書』(小学館 1984)、『定本江戸商売図録』(立風書房 1986)、『復元江戸生活図鑑』(柏書房 1995)、『時代小説職業事典』(学研教育出版 2009)などによると、行商の飴売りの一つとして飴細工売りがある。「飴細工」は、溶かした飴を葦茎の先につけ、息を吹き込んで膨らまし、いろいろな形に作って青や紅で彩色したものである。飴は古くは「日本書紀」にも出てくるが大変高価なものであったこと、江戸時代になって庶民のものになり、唐人風の扮装をして行商する「飴売り」が流行したこと、「飴細工売り」は行商だけでなく、子どもたちを相手に子店を構えるようになったことなどがわかった。作り上げた飴細工を立てた屋台や職人の図が掲載されているが、より鮮明なものがないか一般書の書架を調べてみる。

「露店」「縁日」「香具師」をキーワードに蔵書検索を行い、書架をまわって目星をつけた本を一つ一つ手に取り調査した。『近代庶民生活誌』(三一書房 1994)は近代日本の庶民生活や文化についての文献を集め、体系化した専門書である。その「17 巻見世物・縁日」にも露店の記述はあるが、あめ細工に関する絵や写真は見つからない。『明治物売図聚』

(立風書房 1991)では「飴」の項目に前述と同様の飴細工屋の図がある。『夜店』(現代史出版会 1984)は露店の仕組みから口上まで書いてある本であり、「昔なつかしアメ細工」として飴細工を作っている写真が紹介してある。利用者が求めているのは、屋台の前で細工している風景ということなので、もっと写真が多く収録してある図書を探してみた。

『懐かしの縁日大図鑑』(河出書房新社 2003)は、写真をたくさん用いて見開きに一つの露店を紹介している。「あめ細工」には飴細工を作る手順とうさぎや鳥など細工作品の写真があった。飴細工の歴史は 200 年にも及び、昭和初期頃までは、飴を葦の先につけていたが、現在では割りばしと専用のハサミを使って形を整えているとある。

また、『縁日お散歩図鑑』(廣済堂出版 2002)では、縁日の歩き方や様々な屋台がフリーハンドの白黒イラストで描かれている。「あめ細工」では、屋台の全景や内側にある道具類、飴細工師の作っている様子、最初の丸めたあめの状態や完成したうさぎやうまなどの作品を細部まで丁寧にコメントつきで紹介してある。写真ではなかったが、利用者にとってはこの本が求めているものに近かったようである。

その他に、明治の横浜の写真を集めた『明治の日本』(有隣堂 1990)の中に「吹き飴売り」として飴を吹いている職人と屋台、見つめる子どもたちの写真がある。また、インターネット検索では、現代の飴細工師による個人のページがあり、伝統の継承と Web 上での実演という試みも見ることができ

(本館 北山)

年末・年始休館のお知らせ

期間：平成 22 年 12 月 29 日(水)

～平成 23 年 1 月 4 日(火)

とやま駅南図書館(ぶらり)は、

1 月 4 日(火)は開館します。